
鍵の王国

ウィッテノス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鍵の王国

【ZPDF】

Z0155BA

【作者名】

ウイッグテノス

【あらすじ】

ファンタジー小説に挑戦してみました。

暗い淵。

暗い、淵に沈んでいた。

嗚呼、ここは平穏と無音と無氣力が充満している。

生ける、魂を圧殺せんとする圧力が渦巻いて、存在という殻を突き破ろうと無言の圧力が圧しかかった。

いつから此処にいるのか。

始めの記憶と終わりの瞬間が欠如している。嗚呼、そうだ、ここは永続の世界。

終わりが欠如しているが故に一度入れば抜け出せない。そう感覚で分かる。深遠の闇が海底のように遙か遙か果ての見えない果てまで佇んでいた。

絶望と苦闘の果てに見出した最後の境地。それが、生きながらに黄泉に「いる」ということだった。

恐らくはこの場に留まる限り意識はそう持つまい。だけれど、ただひたすら——心地よかつた。

嗚呼、ここは遙か深い均越な均高の淵。

まるで漂い、浮かび、墮胎したように黒く濁った液に存在している。

この結末の果てに——生れ落ちるか否か、爛れ腐乱するかは如何様にも構ない。

ただ我をこの場に留め、この溶液―――深遠に留めよ。

受難に負けた我を責める声はなく、恨苦に苛まれる事も無い。

定め。

果て落つるは我の定めか。それとも生まれ落つるのか。解らぬ。

嗚呼、嗚呼、未知なる意識が侵食する。

悟る。

この暗闇は、生ける人のいるべき場所ではないんだと。

抜け出さなければ。一刻も早く、この場を去らなければ待つのはただこの深遠と溶け合つという事態になるのを待つばかりだ。

しかしじつやつてだ。

この闇は。

現世に出現したのでもなく、現世にあるのでもなく、ただ俺の内に巢食う闇なのに。

起きる、起きる―――起きて逃げるんだ。闇は肉体の先にある俺の本質に宿っている。

だから、起きるんだ。

現実に戻れば消える闇だ。起きろ…………

そして、起きた。

直前までの夢の記憶が極めて鮮明に思い出せる薄い薄い眠り。
闇の中を漂つ夢。

ああ、いつまで……………こんな夢が続くのか。

部屋は真っ暗い。

カーテンを開ければ外はもう眩しい筈だ。だつて、時計はもう朝の七時半で、今日の天気は晴れのはずだから。

今日の天気すらすぐに思い出せるほど目の前の冴えようだから、当然眠った気はあまりしなかった。

とにかく起き出す必要があった。

もつ近隣の人々は起き出して、朝の活動を、各自の役割を始めるのだろうから。

そうして、宿舎を出ると、暑い口差しが目を焼いた。

——ああ、暑い。

例年にはない酷暑の日差しは空間を歪めて、周りに渙然と並ぶ似たような宿舎を、すぐ近くにあるはずなのに歪め、そのシルエットを分かれづらくしていた。

宿舎の田の前の道路は延々と坂になっていて、協会までの道のりを

鬱屈とした気持ちで眺めた。

しかし時間的にもうそろそろ遅刻になつてもおかしくない時間帯だから、すぐに早足で歩き出した。

修士の身分で遅れたら、いつ首を切られてもおかしくない。だから、平静を装いながらも気持ちは結構焦っていた。

坂を登り切ると傾斜はなだらかになつていき、雑貨店や飲食店が並ぶ結構開いた土地になる。

この坂道から帝都に直通する国道までいけば、そこにはもう協会の建物がある。

そこから更に帝都の方向に少し進めば棟怜順天軍の屯所があり、自然と協会のある国道付近はそこの武家の人たちがよく通るのを目にしていた。

といひで、国道に近づき、協会の建物が見えた付近で、武家の一団と一般の人たちが集まっているのが見えた。

武家の一団が何やら通行人に話しかけている。たかりか、揉め事か、あまり良いイメージは沸かなかつたが、ビラを配つている様子から何かの宣伝だと分かつた。

武士たちの声が距離的に近づくにつれて鮮明になつていく。

「……先年の王太子殿下拉致事件の首謀者、クワトーレ・アミンの情報の提供に協力して欲しい。

また同時に、アミンの所属母体である熱心党とそれに所属する犯罪者達の情報の提供にも協力を願いしたい。

どんな些事でも構わん。市民の諸君、これは内務局からの通達である。広く協力を求める」

そんなことを言いながら、厳しい顔つきで粗野な素振りで武人から俺にもビラを差し出された。

刀剣を下げていたので緊張しながら受け取ると、ビラにはびっしりと昨年の王太子拉致事件の詳細と熱心党の情報、特徴が書かれていた。

会釈をして通り過ぎると、相手は感心なさげに他の市民に眼をやる。王太子殿下の拉致事件くらいは知っているが、普段新聞など読まない俺はこの手の情報に疎かつた。

久しぶりにニュースの知識を頭に入れて時事を知るため、協会までの道のりを、それに目を通しながら歩いた。

一時限目の教科は歴史だった。

学舎に入るとみな一様に席についており、教導書や書物を読んで過ごしていた。

学舎では私語は厳禁であるから、協会での学期更新間近いこの時期は特に会話を楽しむ余裕を持つた生徒は尚更少なかつた。

俺も席に座り、歴史の教導書を開いて、読むでもなく目を通して、授業までの暇な時間が通り過ぎるのを待つ。

息が詰まるようなこの学舎も、あと一期で卒業だと思えばもう少しぐらいなら我慢しようという気になる。

だから、とにかく目をつけられないうに、何事も無く、と思いつの俺も大多数の生徒も同じなのだらうと思つた。

「おい」そんなことを思つていると後ろの席から声をかけられた。友達のグアルが他の修士のものであるはずの席に座りながら、こつ

ちを見ていた。

「探したよ。ルテニア導師がお呼びだ。俺も呼ばれてるんだ、一緒に行こう」

「何の用事で？」俺は怪訝な顔を隠さなかつた。

この時期に導師に呼び出されるなんて嫌な予感しかしない。

「俺らに特別教科があるんだってさ。詳しくは知らないけど、悪い話でもなさそうなんだ」勇気付けるようにグアルは微笑むと、行こう、と言つて席を立つた。

なんだか分からぬが、この時期に面倒な事態にだけはならないでくれ、と祈るばかりだつた。

ルテニア導師の個室は隣の協会本部の三階にあつた。導師は俺たち修士たちに魔術、教養、道義を教えてくれる学校の先生みたいな役割だが、その地位と権威はまったく違つた。

導師は協会から魔術師に選ばれた者達の中で、国家の推薦によって学舎の導師として修士たちを教える立場の人間で、国家全体で数万人しかいない魔術師たちの中でもエリートの部類に入る。

魔術師の存在は国家元首の保安、権力の補佐といった観点からその地位は高貴であり、いかなる場合でも警察や軍、または役人にも拘束する権利は無く、常にその私的な意思は守られる。

王侯貴族、軍隊内部、魔術師の士官先は実に幅広く、その結束も強固だ。

その魔術師たちの作つた同業者組合が「協会」であり、俺はそこで学ぶ、学生のようなものだつた。

だから、導師は敬意を持たれ、かつ怖れられる。

なぜならここに通う修士の大半の悲願は魔術師になることであり、導師はその絶対的な権威で我々の運命を実際に簡単に容易く決定することができた。

「グアルです。イシュテアを連れてきました」とグアルが幾分引き締まつた顔で個室をノックする。

中から「入れ」という声が聞こえると、一人で若干躊躇いながら部屋のドアを開けた。

部屋は一十平米程の広さの、簡素な内装の部屋。

入つたことは2回ほどしかないが、以前入つた時から受ける印象と変わらず、飾り気のない部屋だった。

奥の窓に面したデスクには導師が座つており、その周りにまた二名の、一目見ただけで高貴な位と分かる華美な服装を着た男たちが座つていた。

グアルが息を飲み、直立不動になつて背筋を伸ばす。

その様子にただならない気配がして、俺も緊張し始めた頃に、ルティア導師がぽつりと言つた。

「じく苦労、グアル君。誰にも悟られなかつただろうね」「はい、細心の注意を払つてきました。誰も不審には思つていないでしょ」「

グアルは即答する。

導師は苦笑いのような笑顔を浮かべた。

他の二人の男はくすりとも笑わず、こちらを品定めするように時折こちらを見ていた。

そして突然片方の男が話し出す。

「彼らが君の言つ秀才か。私は連合協会のアサカだ。隣にいらっしゃるのが主事のアルタナさんだ。君らの事は聞いている。楽にしていい」

連合協会！

魔術師たちで作る協会の、更にその集まりで、いわばこの国の協会の総本山みたいなものだ。

そこに所属する魔術師達も国家が誇る秀才揃いで、この国の魔術団体を総括するエリート中のエリートだ。

その方々が、なぜこのよつつな場で俺らに用があるのか、到底理解しかねた。

「君たち二人は、知つてゐるかね。隣国四川が東蛮夷の侵略を受けた事に端を発した内戦を。

四川は一つの勢力に分裂し、それぞれ東蛮夷と戦線を広げている。その内の一つ、我々が懇意にしている部族新邦に要人を送り届けて欲しい。

君たちは我々協会からの特使であると向こうに伝えておく。口外はしないように。絶対にだ」

耳を疑つた。

隣の国で戦争が起きているのは知つてゐる。

だがそれを協会の修士に過ぎない自分が、なぜ特使として派遣されねばいけないのかまったく分からなかつた。

「こちらのお二人は僕の先輩なんだが、いま話された事情によつて僕のところに協力を求めてきたんだ。

君たちには唐突だろうけど、協会から魔術師を派遣できない事情が

ある。修士の中から、それならばとこうじで君たちを選んだ

ルテニア導師はそう言つと席を立つて、険しい顔でこちらを睨むよう眺め見た。

そして髪を撫でながら俯き、ため息のような深い息を吐く。

「推薦の理由は、グアル君はこの学園の学生を代表できる存在であること、イシュテア君は……先方の要人の条件に合致した人物であるからだ。

君たちは特使としてこちらが伝える指示に従い、行動して欲しい。……君たちは、この場で我々三人の権限により魔術師たる資格足りえる存在であると認識する。

が、任務中は修士として外部にも内部にもその事実は伏せて置くようだ。」そう言って、後ろの窓の外へと振り返った。

「私を……魔術師に？」先に呟いたのはグアルだった。

俺自身も驚きを隠せず、気持ちの高ぶりと緊張を隠せずに足が少し震えだしていた。

嬉しいに決まっている。だが、それほどの代価に求められる任務は、一体どんな意味を持つているのだろうと、この恐怖心もまたあつた。

「そうだ。単位と試験を特例により免除する。この国のみならず、君らは世界中で自身を魔術師であると称することができるだらう。その証明は連合協会が保障する。分かるな？ これは特例だ」

そういうと再びルテニア導師は振り向き、鋭利な視線で睨みつける。そこにアサカさんが補足するように言つ。

「事の重大さは認識できたはずだ。他言や悟られる様なことがれば同時にそれ相応の厳罰のリスクがあることを忘れるな。

君たちは八月六日にガザにあるグラムトンホテルに行き、そこで待機して指示を待て。

予約はこちらで取つてある。指示の伝達は協会の人間が直接行う。異存は無いな？」

「はい、「ございません」一人で頷くと、ルテニア導師は険しい顔を窓側に向けた。

そして呟く。

「君らは、このような報酬がなくともいざれ魔術師になつていたであろう秀才だ。

だから僕は対等なつもりで君らには常に接してきた。今回の依頼もそうだ。

君らは信頼している。協会の人間して誇りを持つて仕事をしてくれ「はい」と一人で答えると、導師の顔はいつもの柔軟な顔に戻つて微笑んでいた。

「魔術師として、全てを投げ打つて事に当たれるほど意義のある任務はそうはない。

権威や、威儀や、財産。守るものが沢山あるからね。だから君らが少し羨ましいよ」

そう言つて微笑む導師の顔は、裏表の無い真実の表情だった。

ガザは協会のあるウララテ地区から徒歩ならば四日ほどどの道程がかかる場所にある。

それほどの旅路にはそれ相応の資金と荷物の準備が要るのだけど、鉄道の手配をしてくれているらしく、グアルとは翌日駅舎で待ち合わせをしておいた。

たぶん当分帰れないのだろう、と勝手に算段をつけていたので、その日は部屋の片付けと荷物の準備に費やし、疲れてほとほと眠り込んでしまった。

翌朝、目覚めた時、朝の六時半を指していた。

すぐに起き出して、宿舎の外へ寝巻きのまま出て井戸で顔を洗う。朝の空気が、程よい温度で頬を撫でた。

外はもう明るい。出勤する仕事人や学生の姿がちらほらと散見される。

天気も晴れている。自然と気分が清々しくなるような、朝の空気だつた。

一瞬、立ち眩み。

井戸の端に手をかける。何か一瞬血が薄まつた様な感覚がした。心臓が心なしか弱弱と空打つように鳴っていて、胸をつかんだ。

ふと脳裏に、今日見ていた夢の残照が残つていて、他の記憶から押

し出されるようついに田に浮かんだ。

今日は、あの闇の夢は見ていない。

過去の自分と関連がある夢を見ていた。

一面の青空。草原の土手の茂みを走り回る夢。
サークスの一団が、家族を連れた人々を出迎え、青空の下で様々な
催しをしてくれている。

俺は一人で走り回っている。

大きな色とりどりの玉が、そこいら中に転がっていて、それを追いか
けている。

いつまでもいつまでも。

また井戸の水に顔をかけた。

何度も夢に見る光景。一体、俺は、誰に連れられて、あの場所にい
たのだろう。

誰が、俺をあの場所にいだなったのだろうか。

変な感傷じみた考えをしている、と自分で気づいてやめた。

徐々に血潮がせり上がりてきて、心臓の鼓動に力が戻っていく感覺
がした。

少し休んだのが良かつたようだ。

早く行こう。

汽車は十一時だけど、早めに行つてぶらついたって良いんだから。
そつ思つて、宿舎へ戻ることにした。

駅についたのは十時半ごろだった。

相当ゆっくりとぶらぶら寄り道して歩いたのだが、それでも待ち合わせまでには一時間以上も時間があった。

ふと、昨日の導師の言葉を思い出し、自分がもう魔術師になつてゐるんだと思い出した。

自覚は無い。でもめちゃめちゃ嬉しくて、街中であるにも関わらずにやけそつになつた。

それはそうだろう。

医者、役人、軍の士官。

王侯貴族とまではいかないまでもそれとすら関係の深い、言つてみれば憧れの職業だ。子供の頃からの夢といつても言つて。

そのために今まで努力していたのだから、嬉しくないわけは無い。

だけど自分が導師が言つほど成績優秀だつたとは思えない。せいぜい中流グループにいたはずだ。

グアルみたいな逸材は特例としても、成績上位者はそれこそ元は名家の出で英才教育を受けて、その中でも更に才氣旺盛なやつらばかりだつた。

そりやもう一目見れば輝いているのがわかるぐらい。

グアルはまったく凡人にしか見えない程で、魔術に関しては天才的な才能を見せる。

そこが面白かった。だから話しかけて友達になつた。興味がわいたんだ、奴の内面に。

あいつが選ばれるのは分かるが、なんで俺が、というのが正直な感想だつた。

卑下したことで気持ちが冷めてしまつて、駅舎の待ち合せの場所まで急ぐことにした。

改札で駅員に昨日渡された通行許可証を見せると「「」苦勞様です」と言われて通してもらえた。

鉄道など実に久しぶりだ。軍用、産業物資運搬用にしかほとんど使われないものだから、旅客で鉄道を使えるのは上流の階級の人間ばかりだ。

むかし乗った時はまだ裕福だった頃で、それでも何度も頻繁に乗れるようなものではなかつた。

本当に自分は魔術師になつたんだなあと、ここで再び嬉しさが蘇つてくる。

改札を抜けて駅のホームへと続く階段を抜けると、大型の、それはもう巨大な鉄の塊が停泊していた。

魔力の力で動くだけの、鉄の塊。

鉄の加工技術が貧弱な我が国では複雑な形状の車両は作れないが、それでも以前乗つた時には内装だけは豪華な作りで、煌びやかな装飾を施した乗り物だつたと記憶している。

昔より形は幾分か変わつていて、多分進行のスピードを上げるためだろうか、機能的なフォルムに変わつていた。

先端がなだらかな曲線で、巨大な車体が芋虫のように横たわつていた。

まるでビル一つ寝かせたような巨大な鉄の塊は、まるで息をするように上下にゆれていた。

ホームの途中途中には屋根の付いた小屋のような駅舎があり、それに番号が割り振られていた。

俺とグアルは八番駅舎で待ち合わせている。だから数字を順に追つていつて、八番の駅舎の扉を開けた。

中にはタバコを吸っている会社員風の男と、グアルが座っている。

「一人とも」から「田をやる。

グアルが「よつ」と声をかけた。ずいぶん早い。まだ出発までは一時間以上もあるのに。

「……やはり、内容が内容だから遅れないよつに早めに来たのだろう、」いつも。

「お前も早いな。どうする? 出発までまだ大分あるよ?」と俺が腰掛けながら話しかけると、グアルは苦笑いする。

「いや、しようがないよ。魔術師になつたばかりでの仕事だし。そりや万全期すだろ。

昨日は悪いね、不意打ち的にあそしに呼んでしまつて。周りに聴かれないよう」にとの、導師の配慮で「

タバコを吸つて「おじさん」がちらりと「」を見つけて、また灰皿に視線を戻した。やはり珍しいらし。」の職業の人間は。

「良いよ、気にしてないから。

それより仕事の事で知つておきたいことがあるんだけど……」する

とグアルは話を遮つた。

「いや、それは後からにしよう。後で話すよ。俺も詳しくはしらな
いけどね」

そう言われてああ、そうか、無用心だったな、と自分で恥ずかしくなつた。こいつのほうがよつぽど自覚してる。

仮にも外でどんな耳があるか分からんんだから、喋る様な事じやないと気づいた。

「それより、鉄道なんて俺は初めてだよ。お前乗つたことある?
俺なんて駅員さん聞いてこじままで来たからね」

とグアルは笑いかける。

「俺は一回ぐらこあるけど、殆ど覚えてないぐらこ昔だよ。
君、平民の家系だからねえ」と冗談めかして言つと「あ、酷いなあ」と向こうも冗談だらうが、怒つたような顔をして、その後で笑う。

…………こいつは、苦労して分めちやくひや良い奴だ。

通常協会から選出される修士は魔術的な才能のある名家の出が大半だが、玉に民間の学園で才能を見出され、選出される修士がいる。俺もその中の一人なのだけど、俺は元々名家の出身で、その後に平民になつたから、本質的には魔術的な名家の血を引いている。
だから、こいつのように完全な平民の出で修士になる人物は珍しい。

「やつぱ鼻にかけてるんだろ? 自分がイシュテアの人間だつて。
光る原石だと思つてるんだ?」向こうが悪戯じみた口調で言つ。

「いやいや、冗談だから。イシュテア家つて言つても分家の上に潰れたから。まあ光る原石だとは思つてるけど」といつて俺も笑つた。

「やつぱやう思つてるんだ。良いねえ生まれながらにサラブレット
な人は。俺なんて本当に馬小屋で生まれたからね。
生まれた時子馬と田が合つたからね」こいつが自慢のよつに何度も
繰り返す自慢じやない話。

馬小屋で生まれたという話を自分の身分をあざ笑う様に「冗談めかして言つ。

「そうそう、平民でも馬小屋で出産なんて状況ないと思つから、嘘かほんとか俺には分からぬ。

「いやいや、それも冗談だつて。良いじやん、馬小屋だつて。啓示者だつて馬小屋で生まれたつて伝承があるよ。お前大物になるつて」

「絶対思つてないだろ」「いや……お前成績良いから。割と真剣に思つてゐるよ」「ほんとかよ」とグアルは笑うと、まんざりでもなさそつに背もたれにもたれかかつた。

他愛もない会話だが、こいつとの会話はいつも楽しい。波長が合つていうのかな、こいつがほんとに大物になつたら、その時も変わらずに友達でいたいと、またいつものようにそつ思つた。

汽車。

汽車に乗っている。

隣ではグアルが眠りこけており、先ほどの緊張した素振りがすっかり消えているのはさすが大物だと思った。

仕方なく、窓の外を見る。

分厚い鉄の重厚さに合わせた窓は、それ自体も分厚く、窓の外までの光景を遠くに見せて、まるで密室に閉じ込められたように息苦しくなるような感覚を覚えた。

だから席から立ち上がって、開放車両に移ることにした。

グアルの足を強引にどけて席を立つたとき、黒塗りの車両が窓の外に見えた。この鉄道を護送する駆逐車だ。

鉄道の周辺には駆逐車と呼ばれる車両が一つの鉄道車両に4車から8車両護送についており、襲撃も下手な規模で手を出せば返り討ちに合ひつということを以前聞いたことがある。

この鉄道自体もパルチザン活動家やゲリラから産業物資や軍需品を守るために極度に硬化されている。

そうしなければならないほど、この帝国は人から恨まれることをしていると言つことだ。

滅多な事は言えないが、やはりこの国も大国レースに勝ち残るために他者を犠牲にしてきた歴史があるということだらう。

俺も子供の頃の教育でそういう歴史を教えられたが、良い気分には、ならなかつた。

みな自國の華々しい戦果や、勝ち組であることを聞くと、学校の子供ですらそのことを誇るが、それが、いつ自分たちが転落するかもしない状況にあること、そして今の地位を築くために犠牲にした人々の恨みを買つてゐることを思えば、転落した時の苦痛はまたそれ以上だらつと思つた。

だから、俺は恐ろしかつた。

いつか負けた時、虜げられてきた彼らと同じじところまで落ちたとき。苦難という地獄で育つた怪物に、我々は滅ぼされるとこいつこと。

開放車両の扉を開ける。

不思議なことに誰もいなかつた。

まだ、ガザに着くまでには相当な時間がかかる。

俺は窓をのぞむソファに腰掛けて、持参した魔道書に目を通して時間を過ごす事にした。

「ガザに到着いたしました。御降りの紳士、淑女の皆様方はどうぞお気をつけて御降り下さいませ」

なかなか起きよつとしないグアルを起こして汽車を出た時にはそんな丁寧なアナウンスが流れていた。

二人でまばらな客達をかいぐぐつて階段を降り、改札を出ると、繁

張を解いて深い息を吐いた。

それも当然で駅には私服の軍人や警察がいたるところにいると以前聞かされていて、まさか目はつけられないだろ？が緊張ぐらいはあるような状況ではあった。

「で、グラムトンホテルはどこだったかな。俺は地図に疎いので、お前に任すよ」グアルがそんな無責任なことを言つと、地図を手渡してきた。

事の準備に必要な道具や情報はグアルに渡されている。
そのことからも、俺はグアルほど信頼はされてないらしいところが分かる。

劣等感じみたものを感じながらも、俺は渡された地図を見て、目的地までの道順を考える。

「いや、駅のすぐ近くみたいだよ。ここから駅を出て、駅の一階に行くらしい。で、それをあっちの百貨店の方向に行けば、その辺にあるみたいだ

二人で頷くと、発展し整備されたガザの町並みに感心しながら、目の前の駅の一階へと続く階段を上った。

「…………お前には、話しておくれ」と唐突にグアルが言つ。

続きを促すように俺はグアルを見た。すると彼は耳打ちするよつて顔を近づけて小声で囁く。

「警察、軍、国家にまつわる役職に付く全ての人間に対して、今回

の仕事は厳重に口外してはならない、と言われた。

これの意味するところが分かるか？ つまり他国への干渉を性質としている今回の仕事は、協会の独断だ

「それは、どういう意味だ」とすぐに聞き返すと、グアルは押し黙つた。が、やがて話し出す。何か、口の重い話を語るような素振りだった。

「よくはわからん。よくはわからんが、四川は今は内戦中だ。三つの勢力が互いにいがみ合っている中一方の勢力だけに協会が肩入れするというのは当然他の勢力を刺激する。

そして当然、協会は我が国の権力の中枢にある、政府を諮詢する団体の一つだ。この行動は国家の意思で無ければならないはずなんだ。しかし、導師は国の関係者、警察、軍には特に内密にするよつこと言つていた。

これが協会の独断だとすれば……もつその時点で重大な憲法違反だ

俺は驚いて、恐らくは希望的観測を口にした。

「まさか！ そعدだとは限らないだろう。国家の関係者への口外を禁じているのは単に末端の役人や軍人にはればなら面倒な事態になるからとか、そういう理由もあるんじゃないかな？

仕事の正確な内容を知らない俺には、詳細はわからないけど、少なくとも聞いた範囲では決め付けは出来ないぞ。

そもそも協会が独断をして罪を犯すのも考えにくいし

グアルは遮るように言い返す。

「もちろんだ。だが俺はお前を仲間だと思つてゐるから、全部喋るつ

もりだ。お前の意見も聞きたいからな。
そういう可能性も、あるという話だ」

沈黙が訪れる。気まずさとか、感情的な間ではなくて、純粹に考える時間が必要なための間だつた。

俺が先に考えを口に出した。

「そういう可能性があつた場合、俺たちに求められるのはなんだろうな」グアルは首を振る。

「わからないけど、少なくとも導師の言つよつに口外しない、という徹底が必要だな。もしかしたらいまいづして喋つてゐるのもやばいかもしねえ。

この話はここまでにしよう。俺らに、できることなんて今は従つてることくらいしかないんだから

重い雰囲気。

先の見えない不安が横たわるのに、外は晴れ晴れとして、なんともアンバランスで気持ちとの調和が取れない、嫌な景色だつた。

グラムトンホテルへはすぐについた。

チェックインを済ますとホテリアーから鍵を渡され、502号室へと向かうように言われた。

さつさと部屋に入ろうとする俺たちにフロントのホテリアーが「お連れの方も、もう」到着されております」とにこやかに言つのを、

俺とグアルは顔を見合わせて、同時に緊張が人相に現れた。

階段を上りながら、グアルが話しかける。

「誰だ、待っているやつってのは、協会の人間か？」

「分からぬ。先方の要人という可能性もあるぞ」俺自身疑問と、そして強い不安を感じていた。グアルもそうなのだろう。

やがて階段を上りきって、すぐ隣が502号室だった。

「先にノックをしよう」そうグアルが言つと俺の前に立ち、コンコン、と少し強めにノックした。

少し間が空いたあと、突然扉が開く。

扉の間から、やたらと田つきの鋭い、酷薄な感じを覚える瞳をした女性が俺と、グアル。順に見据えると、「協会の人間?」と小声で囁いた。

「そうです」「そうだ」俺とグアルはほぼ同時に答える。

すると相手はふいと顔を逸らし、扉を大きく開け放つて「入つて」と呴いた。

グアルが怖氣も無く中に入つていいくので俺も従い、廊下を抜けて客間の中へと入つていく。

すると視界が開けて外にはガザを展望できる一面硝子張りの室内と、キングサイズはあらうと思われるベッドが三つも備え付けてある豪華な客間があつた。

一体何平米だよと驚くほど広い客間に、蒼然と高そうな家具が並んでいた。

そして軍艦を油絵で描いた大きな絵画を背にしたソファの上に、若い女性が座っていた。

すらりと伸びた足を組んで、整った顔でこちらを何か怪訝に見ている。後ろからさつきの日の鋭い女性が来て、

「協会の人間です」と、俺たちに対してとは違う、抑えの効いた、優しくトーンを落とした声で彼女に言った。

彼女は眉間の皺を緩めて、こちらを見ながらに言った。

「そうでしたか。これから、」厄介になります、アズチと申します。協会からの特使の方が護衛をしてくださると言つことで、非常に心強く感謝の気持ちに堪えません。

貴方方は、協会の方からは何と?」

グアルが困惑したように言つた。

「我々は、貴方方を隣国の同胞部族新邦に送り届けるように仰せつかっています。

まず、ホテルについてたら協会の人間からの指示を待てと言われてましたので、いきなり貴方方がいらっしゃったので驚いているような状態です」

「そうでしたか、それならば貴方方が次の指示を受けるまで出発は延期ですね。

どうぞ、私たちには遠慮せずにお寛ぎになつてください。
必要なならばルームサービスで好きなお食事を取つていただいて構いません」

そう言つと彼女はテーブルに置いた雑誌を取り、コーヒーを啜つた。先ほどの田の鋭い女性も彼女の隣に座つた。

俺とグアルはお互に見合つが、どうして良いか分からないうな状態だつた。

取りあえず俺がアズチさんの対面のソファに座ると、グアルも俺の隣に座つた。

そして俺は「お腹空いたね」と呟いた。

一人の女性がくすりと笑つて俺のほうを見る。

「ルームサービスは、自由ですよ?」アズチさんがそう呟いて、また雑誌に田をやつた。

「マジか、お前……」グアルが飽きたように俺に向つ。

「良いじやないか奢つてくれるつて言つんだから。痛ことこひこひり反応するなよ」

「俺は外で買つてくるよ……」グアルがそう言つと「ああ、俺もうするやつぱり……」と財布を思い出しても憂鬱になつた頃。

「お金の事は構いませんから、遠慮なさらないでください。協会の特使の方々に関して、その費用はこちうで負担すると言つてあります。お気になさらずに」

「じゃあハンバーグを食べたいな俺は、お前どうする? フライドチキンとかさ」と俺が少々躊躇つ時間を省略して言つとグアルは俺を諭すよつこ言つた。

「そういうわけにいかないだろ。協会の大事な客人だぞこの方々は。少しは遠慮しろ。俺は外で買つてくるから」冷たく言い放つ。

「分かつた、俺もちょっとおかしかつたよ。俺も行くから一緒に行こ」

するとアズチさんが言つ。

「本当に遠慮しなくて良いんですよ？ これからこちらが旅費や食費宿泊費を負担するわけですから、それも報酬の一部と考えていただければ」

「じゃあハンバーグにするかな。お前は？」めげない。だつて本当にお金が酷い状態になつて恐らく幼稚園生でも数えられる範囲内のお金しかなくて旅の間ずっとそれが心配で朝ごはんだつて食べてないんだから昨日の夕飯でお金ないから。

「もう好きにしていいよ……」そう言つてコートを取つて出かけようとするグアルに「お前これ見てみろよ」と俺は半ば怒つて財布を押し付けた。

「なに、これ」「財布だよ。特待生と普通の修士の差がこれだよ」グアルは財布の中身を見て驚いたよつた顔をした後すぐに閉まつた。

「分かつた悪かつたよ。あんまり見せびらかさないほうがいいぞこれ」「俺が今日の朝食抜いた真相があつたはずだぞ、あ？」「わかつたわかつた」グアルは苦笑いすると部屋を出て行つた。

「ルームサービスつて幾らまで良いんですか？」さすがに苦笑いし

たような二人の笑顔が痛々しかつた。

たまたま時計を見ていて、グアルがホテルの外へ昼食の買出しに行つたのが二十分前。

その間に俺はルームサービスを頼ませて頂いて、まだ食事が到着していないくて空腹で非常に恼ましい状態になつていた頃、グアルが先に帰ってきた。

紙袋を提げて、中からカツ丼を取り出して俺の隣に置いた。

「お前それ美味そうだな」

「あれ？ お前は？ 結局頼まなかつたの？」 「いや、まだ来てない……」 「そうなんだ」 そう言つて食べ始める。

「お前それ美味そうだな」 話を振り出しに戻した。奴は苦笑いしながらあつちいけ、とでも言つよつに箸を振つた。

するとその様子を見ていたアズチさんが雑誌の上から顔を出して俺たち一人尋ねてきた。

「貴方方はたしか先ほど、修士と仰つていましたが協会の魔術師の方々ではないのですか？」

俺たちは冷やりとしたを感じる。グアルも一瞬箸が止まつたのを見て取つた。新米魔術師だと知つたらどういう反応をするか。

もしかしたら俺達が新米であることは知つてゐるかもしれないが、協会とそこまで意思疎通してなくて知らない可能性もある。

だからその場合どういう反応と評価が来るか怖かった。どういう風に言おうか考えていると、先にグアルが口に出した。

「いえ、それは以前の話でして、我々は正式な魔術師の資格を持つた協会員です」

良くもペラペラとそのようなことを……と思いつつ妥当な返答だなと思った。相手は満足げに頷く。その反応からやはり新米ということは知らなかつたんだと分かつて冷や汗物だった。

「そうでしたか。魔術師と言つことでしたら、私は詳しくは存じ上げないのでですが、やはり何がしかの魔術に精通していらっしゃるのですか？」

「その辺の事は詳しく知りたいと思っているんだ。旅の途上でトラブルがあつた場合貴方たちの能力を知つておきたいから」目の鋭い女性も関心ありげに話しに乘ってきて、その鋭い視線でプレッシャーを与えるように睨んだ。

魔術。

それは魔力資源の器としての人間を中心には據えた、魔力を動力源とする行動。

人間を魔力の保管庫とし、それを魔術的行為を行う媒体に写し、その魔術的行為を定義づける術式によつていかなる事象をどのような状態で発散するかを定める。

魔力というのは誰にでも宿るが、存在している人間からの供給量は微々たるものなので、必ず魔力を供給してくれる「何か」と契約を

結んでいなければならぬ。

実はここが肝で、修士や魔術師に名家の出身が多いのはそういうた
特別な「何か」と代々契約し、特別な関係を結んでおり、そのため
に一般の人々より遙かに魔力の最大数が多く、その結果様々な魔術
的行為が可能になる。

幾ら魔力があつても魔術を実行に移す媒介がなければ意味は無いの
だけど、それは入手が容易なため問題にならない。

だからより多大な魔力を供給してくれる「何か」と契約を結んでい
る名家はそれだけに有利ではあるが、人間一人一人には魔力を收め
る器があり、それぞれ收められる数に差がある。それが一般に才能
と言われている。

俺自身、名家出身だから魔力を供給してくれる存在と契約を持つて
いる。

グアルもそうであるはずだ。

ただそれは門外不出であることが多いから、いかに友人とはいえ教
えてもらつてない。

そんなことを聞いた時点で非常識と見なされる。

「俺は炎を生み出せます。空間を破裂させる爆発みたいなものです。
その爆発の規模は手持ちの媒体次第ですが、大抵使い分けるために
爆発の種類に応じて幾つもの媒体を所持していますが今は十種類所
有しています。

具体的な規模は最小がタバコに火をつける程度の爆発。最大が家一
軒吹き飛ばせる規模の爆発です。

今は、俺にはその程度のことしかできません」

「へえ、さすが協会から派遣されてくるだけあるな。攻撃的な魔術の中でも実用的なレベルまで使える魔術師はそうそういないから」

しかも十代の修士でそこまでやれるなんてのはもつともつと稀だつて。果たして俺に立場があるのか非常に疑問だつた。

目の鋭い女性がこちらを睨む。こちらに話をしようと催促するよう。いや、睨んでないのかもしないけどそう感じた。お前は何ができるんだみたいな。ルームサービス取つといて何も出来ないわけ無いだろみたいな。

「……俺はですね、ちょっと特殊なんですが媒体を直接動かしてその性質形状を変容させて活動させることができます。具体的には操り人形みたいなもので、十五種類の媒体の中からそれぞれ役割と性質が異なる人形を作り出せるわけです」

「聞いた事の無い魔術だね。傀儡人形みたいなものなのかな。面白いねそれは。その人形はどんなことが出来る?」

「そりやもう荷物持ちからクッキングまで幅広く……」「こいつの能力は戦闘においては人形を囮に使えますので有用です。その気になれば人間と同じ行動を取れますので活用次第では非常に強力です」
「アルがいらない補足を入れる。

「囮つてお前……俺の大事な傀儡を囮になんか使えるかよ。争いに使うなんてもつての外だぞ? 壊れたらどうするんだ」

「また新しい媒体を買えばいいじゃないか。お前は傀儡に感情移入しそうだ、生きてるわけじゃないんだからもつと有効に活用するべきだ。

まあ口出すする気はないけど」してゐるじゃねえかこの。

しかし客人の前で言い合つのもみつともないのでここは我慢する」とした。

「なるほど、確かに有用な魔術だね。分かつた、二人の能力は把握できたよ。あくまでトラブルが起きた場合だけ、頼りにしてるからね」眼の鋭さを幾分か和らげて、緩く笑顔を作った。

合格というところか、と判断して胸をなでおろす。

導師にもこのレアな魔術のおかげで褒められてた記憶がある。この志向のおかげで俺に学舎の中で個性があつたのだから。そしてまた訪れる沈黙。

協会からの伝令とルームサービスが来るまで、また居心地の悪い沈黙の間を幾分か待たなければならなかつた。

こんこん、と良く響く音で音の振動が静かな室内に響き渡ると、みな眠りから醒めたように顔をあげた。

ルームサービスか、協会からの使者か。

それが目の鋭い女性、イスさんが応対して協会からの使者だと分かった時、一体ハンバーグ作るのに何分かかんだよという怒りが胸中にせり上がった。

白い外套を着た使者が、こちらの様子を険しい表情で一望すると、唐突にアズチさんの前で跪き、深く頭を垂れた。

「恐れ多くも、タイソティのお手通りに叶いまして、恐悦至極の極みに至るところであります。

連合協会からの回答はここにあります両特使の派遣によるところにあり、我ら全協会の魔術師の総意によりまして、貴方様の一命をただ察するばかりであります。

この口の至らない我が身をお許しください。されど我が舌は貴方様に謁見できた喜びを言い表すには相応しくなく、ただ協会からの意向を示すに留めるばかりであります」

タイソティ……？

この方も貴位の高い魔術師と見受けれるが、恐ろしく改まつた感じでアズチさんに跪くので、もしかして俺はとんでもないことをしたのではないかと心臓を驚撃みにしてロープで縛り上げたような身の凍る思いがしていた。

だつて、ハンバーグ頼んだから、もしいまルームサービスが来たら魔術師の資格の剥奪もありえるんじゃないかと思え、とたんに俺は背筋をびしと伸ばした。

アズチさんは何か愛しむ様な目で使者を見据えると、語つた。

「礼儀は略式して構いませんよ、協会の方。貴方は私の友の友。私の味方、私の良き僕です。

さあ、彼らに伝えるべきことをお伝えになつてさしあげて」くすりと、余裕のある表情で微笑む。それはどこか、正視できないほどの美しさを湛えていた。

使者は長い間彼女の前に頭を垂れ、やがて決心したようにひざに向き直つた。

その様子には彼女に対する深い深い敬意があるのが見て取れた。

だから俺らも自然と背筋を伸ばし、使者の方に向き直つた。

「君たちの使命は唯一つ。この御方の御身を何にえてもお守りすることだ。そのためにいかなる犠牲を払おうとも、それが連合協会の総意で、どのような罪を犯そうとも我々全ての魔術師がその責務を負う。

躊躇いは恥だと思え。例え死するともそれが名譽だと分かれ。この御方を、お守りしろ

強く、躊躇わぬ、また躊躇わせぬ決心のついた声で、強い意思のある瞳で、使者は言い放つ。

我々が思わず「はい!」という声をあげると、彼は少し笑つた。

「頼んだ」そうこうと使者はアズチさんに一礼をして、速い足取りで去つていった。

我々一人はぽかんとそれを眺める。何か場に飲まれたように圧倒されていた。

「伝令は受け取られましたね。それでは出発いたしますか？」

アズチさんが空虚な空氣間の中を独り意に介さずに喋る。もしかしてめちゃくちゃ偉い人なんぢやないかという緊張が沸いてきたが、そんなこと考へてもしようが無いだろという開き直りが押し返した。

「我々はつまり貴方についてその身を守れば良い訳ですね。最初の命と変わりませんが、それがめちゃくちゃ重要だといつことは伝わりました。

出発しましょう。急ぐのであれば、すぐにでも、急がぬのであれば、ルームサービスが来てから「もちろん場を和ますためだつたが、グアルから睨まれる結果になつてそれ以上なにも言わづ恐縮した。

「すぐに出発いたしましょう。我々はすぐに出れます」グアルが取り繕つよつに語る。

「ルームサービスぐらい、待てますよ?」アズチさんが悪戯っぽく俺に笑いかけるのを、萎縮した体を萎ませて答えた。

「いえ、ハンバーグぐらいなら、耐えられますから……」「ステキでも何でも耐えてもらわなきゃ困るよ……。さあイシュテア、準備して」

「チーズハンバーグなら耐えられなかつた……」「分かつたから早く」グアルが俺の荷物を取つて押し付けてくる。

そこに来て俺も真面目モードに切り替えることにして、さてと、と独り呟いてソファから立ち上がつた。

「どういうルートで四川まで行くのですか?」俺はアズチさんに問い合わせる。

「四川との国境地域にある村に、閉鎖された病棟があります。そこには四川に通じる地下通路があつて、その場所から四川に密入国します。

国境地帯は海人派の勢力が占拠していきますから、これに見つからず極秘に、ですね。

その村までは汽車と馬車を使用します。手配は取つてありますから、護衛をよろしくお願ひいたしますね」

「了解です」そう答えるとアズチさんも立ち上がつて何か、イスさんに囁く。俺たちは俺たちで荷物だけ持つと廊下で彼女等を待つことにした。

昨日の今日で再び駅に戻ってきた。

正直言つて、非常に疲れた。なんせ今日の朝に出発してガザに来て客人に会つてそのまままたすぐ出発だから。

最終的には四川国境地帯の村、ティアーテまで行かなければならぬのだけど、そこまでには鉄道と馬車でも一日はかかるから、今日は鉄道で明日の朝までかけて行けるところまで行くのだ。だから自然にため息ばかり氣づかれないようについていた。

「イシュテア君、これをどうぞ」と言つて手渡されたのは再び鉄道のチケット。

これを質屋にもつていつて換金すれば3万シユケル手に入ると言つ魅惑のチケット。

なんせ一般の人の月収が一三万シユケルほどが普通だから、このチケットの定価がいかに高いか分からうと言つもの。

ちなみに俺は月五千で生活している。一般的の月収の四分の一以下だ。贅沢は敵ですが口癖なぐらい省エネして生活している俺は、金持ちがそれだけで嫌いだった。

……完全に嫉妬だけど。

「(イ)苦勞様です」また駅員にそつ声をかけられつつ改札をぬけて階段を上る。

トレーンはあるホームのうち今度は五番だと言われていて、間違つたらどうしようと叫う心配は今度はみんながいるからあまりなく、もし間違えても俺のせいじゃないという安心感が俺を守っていた。

手近にある小屋の中に入り、四人で小屋を占領する。小屋の中には幸い誰もいなかつた。

そこで俺は取り出した。

貧しい生活の唯一のぜいたく品、煙草を。

一日十本と自ら決めているソレは、魅惑的なフォルムで俺を誘つていた。

「煙草かよ、あとからにしろよ。女性もいるんだぞ」紳士的な余裕を持つたグアルがそう言つので、野獣のように睨んで抗議する。

「だつて吸いたいんだもん。今日忙しくて吸う機会なかつたし煙草美味しいし二コチンが足りなくなつてて気持ちが焦るから可愛そつだという感情が出てるだろうから吸わせてよ」早口で懇願する俺に、イスさんが苦笑しながら言つた。

「吸つていいよ、私も吸うから。吸つて」「ああ、ありがとうござります、氣を使わせちゃったかな」という俺にグアルが「そりゃ使つてるだろうな。今の流れだつたら」と冷たく言つた。

俺は無視した。そして煙草に火をつけた。

頭の芯の意識が薄まるような感覚。倦怠感が心地よく気持ちを落ち着かせた。

「それで、僕としては知つておきたいのですけど、護衛というのが

今回の我々の仕事ですが、貴方方を何から守ればいいのかと言つことを知つておきたいです。

今までの話の流れで把握していることは貴方方の敵と考えられるのは海人派の勢力と東蛮夷であるということは分かっています。その場合国境を越えた時点が最も危険だと考えられますが、貴方方が実際に考えている危険性のある時期、勢力はどんな場所と人物ですか？」「

煙草の影響で頭の回転が戻ってきたのでそう尋ねると、アズチさんとイスさんが顔を見合させた。俺が質問をぶつのは予想外だ、という様子だった。

グアルは黙っている。たぶん、聞きたい事が俺と同じだったのだろう。

「そうだね、貴方方に隠し事をしては命取りになりかねない。だから先に言っておくよ。今この場にいること事態が非常に危険性を孕んでいる。

それは、この国の政府が私たちを拘束する目的で捜査網を狭めているから」「

「政府がって！ なぜ？ 貴方方は協会が保護を約束しているのにグアルがたまらずに大声をあげる。俺はそれを無視してもつと意味のある質問をぶつけた。

「つまり政府と協会の意向が違うわけですね。ではなぜ貴方方は政府から狙われているんです？」俺は心の準備をしていて、そういうこともありえるだろつと思つていた。

今日のグアルとの会話の中で、協会の独断もあり得る、といつ話をしていたから。

だから次の質問をもう用意していたのだ。

これは勘もあつた。

ホテルを出てからの一人の様子が明らかに緊張していたから、もう危険性が発生しているのだと分かっていた。

加えてその危険性は何かと考えた時、グアルの言うようにこの国の軍人警察がそうであるといつとも警戒していたのだ。

「その前に確認することがあるよ。貴方方は協会からの意向と、政府の意向。どちらを優先するの？」

グアルが言葉をつづつする前に、俺は先に答えた。

「協会からの意向です。なぜなら国は俺から税金を取るけど、協会はお金をくれるからです」最後は冗談だつたけど、回答は真意だった。

国と敵対しても協会が何とかしてくれるとこつ樂觀と、魔術師としてのアイデンティティを失う恐怖から、即答できた。

「本当に？ それで良いの？」「はい、迷つていません。それが今は最善だと思つてます」そう俺が答えると、グアルに俺ら三人の視線が向いた。

グアルもそう時間がかからずに結論を出したようだつた。「俺も同じです。ではなぜ政府から追われているか話してもらえますね？」

グアルの問いか少し間をおいて、言葉を待つよつてイスさんがアズ

チさんに田をやると、アズチさんは真剣な様子で口を開いた。

「私はこの国の誘拐された王太子です。イスは私を攫つた熱心党の一員です。しかし私は元は隣国四川の奴隸階級の人間でした。

四川が東蛮夷との争いに陥つた時、私は海人派の政府によつてこの朱丹の王族の養子にだされました。

それは私が預言者の家系にいる存在だからといふことと関係があります。

カナシユトゥル派の預言者の家系は代々十八の民族の長です。それら十八の民族は四川から東蛮夷のある王国に広がつてあり、この朱丹にも多くの人々が暮らしています。

部族新邦とは、それら民族の集まりからなる団体で、海人派の人々と敵対しています。

ですから、四川を支配していた海人派の勢力の力が弱まつて十八民族が勢力として纏まつた時、その民族の集まりを決定的に統合する王の存在を海人派の勢力は恐れたのです。

彼らは隣国の朱丹にその奴隸たちの王の娘を預け、残つた王とその一族を皆殺しにしました。

なぜ、私だけ生かしておいたのか、それは分かりませんが、熱心党は部族新邦から派遣された私を奪い返すためのグループなのです」

熱心党と誘拐された王太子の事件。

昨年國中を揺るがした世紀の大事件。

その王太子殿下と主犯組織熱心党のメンバーが目の前にいる。

一瞬現実感がなくなりかけて、すぐにそれを認識しようと頭が必死に活動する。

「ちょっとちょっと待つて。王太子って言つるのは男じゃないんですね？」

「来歴を隠す目的で、私は男として振舞うよう訓練されました。そしてそれは私の立場が、秘密を守つてくれました」

信じがたい話だけど嘘をつく理由があるとは思えないしそんな状況ではない。
そして協会の重要と思われる客人であることが、その信憑性を増していった。

「つまり、なぜだか分からぬけど協会は貴方方と部族新邦を援護していく、政府はその逆であるわけですね。」

なるほど、それなら話は早い。我々の雇用主は協会だ。貴方方を支援すればそれでいいわけだ。そうだろう、イシュテア」

俺とグアル、二人の考えの統合を図りたいのだ。その単純な結論の提案は俺もありがたく、かつ気が楽だったので頷いた。
つまり、思考を停止して考えるプロセスをやめ、結論だけ先に出しだ。

これほど重要な事柄。下手をすれば国から拉致の共犯にされかねない犯罪への加担。

しかし経緯を聞く限り拉致ではなく彼女、王太子の望みによつて拉致されたようだし協会からの命令もある。

とはいえ犯罪者の烙印を押される可能性のある選択。
結論はもう仕事続行に傾いているのだから、それ以上何も考えないようになつた。

「さうだな、さつきも言つたけど、俺は税金が嫌いだ」

「ありがとう、話が早くて助かるよ。だから、続きの話は鉄道の中でしよう。ちょっと聞かれたら、まずいからね」そう言って苦笑いするイスさん。

アズチさんもありがとういざこます、と恥くよつと言つて俯いた。

やがて線路の中を巨大な鉄車が走つて、やがて止まる。

俺と、グアル。それぞれ小屋を出て鉄の車の扉の前に立つと、一際鋭敏な俺の耳が、もうすぐだから、とアズチさんに囁くイスさんの声が聞こえた。

アズチさんは俯いた顔を上げ、じけうに近寄つてくる。

俯いた、顔を上げたときの上目遣いの顔は、意外に幼くて、まるで遠い昔に何度も見たような、デジヤビュじみた感覚を覚えるのを、不思議に感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0155ba/>

鍵の王国

2012年1月13日18時51分発行